◆登場人物

男１
男２
男３
男４
男５
男６
男７
女１
女２
神様

病気

別役実

電信柱の下に、汚れた天幕が張ってあり、鉄製の粗末なベッドがひとつ、事務机と椅子が二つほど、置いてある。机の上には、《受付》と書かれた札、簡単な事務用品、医療器具などがある。電信柱に、これもかなり汚れた看板が立てかけられてあり、そこに《応急救護所》とある。舞台が明るくなると、机の向う側に、くたびれた看護婦の衣裳を着た女Ｉが、ぼんやりと煙草を吸っている。カバンとコーモリ傘を持った男Ｉが、通りかかる。

女Ｉ　（呼びとめて）ちょっと、あんた……。

男Ｉ　え……？何ですか……？

女Ｉ　あなた、病気じゃありません……？

男Ｉ　私が？いや……。

女Ｉ　そう……。それならいいんです……。

男Ｉ　何を……（言ってんだ、と口の中でつぶやきながら行ってしまおうとして、ちょっと気になり）でもどうして私のことを病気だなんて言ったんです……？

女Ｉ　病気だなんて言いやしませんよ、私……。ただ、そうじゃありませんかって、聞いてみただけです……。

男Ｉ　私は、病気じゃありません。どこも、悪いところなんてありませんし、食欲もありますし、夜もよく眠れますし、朝だって気持よく……。

女Ｉ　だから、それならいいって言ってるじゃありませんか。

男ー　（はじめて天幕に気付き）でも、ここは何なんですか……？
女ー　（灰皿に煙草をねじりつぶしながら）　オーキューキューゴショです……。
男ー　何ですって……？
女ー　（アゴで看板を示して）書いてありますでしょう。オーキューキューゴショですよ……。
男ー　（看板を見つけて）ああ、オーキューキューゴショね。何か、あったんですか……？
女ー　何かって、何です……？
男ー　いや、だって……どうしてこんな所にオーキューキューゴショなんて、あるんです……？
女ー　ですから……（ちょっとためらって）用心してるんです、私たちは……。
男ー　用心……？
女ー　病人なんて、いつどこに出るかわからないんですから……。
男ー　まあ、そりゃあそうでしょうけどね……。
女ー　緊急の患者さんが出た時、ここで簡単な手当をするんです……。
男ー　はぁ……。（と、不得要領ながら行きかけて、再び立ち止り）私、顔色が少し悪いですか……？
女ー　何です？
男ー　いやいや……今、あなた、私のこと病気かって聞きましたからね……。
女ー　（ムッとして）聞いただけですよ。
男ー　いや、だから……だからつまり、そう聞いたのはもしかしたら、私の顔色が少し悪いせいかなって……
　…そう思ったもんですから……。
女ー　（あまり関心を示さず）顔色ですか……？

男ー　そう言われたことがあるんです、つい先日、家内にですね、あなた最近、顔色が少し悪いみたいよって……。もちろん、その時は全然気にならなかったんですが……。

女ー　（そっけなく）そうでもないんじゃないんですか……。普通ですよ……。

男ー　普通……？ということはつまり、そんなに良くもないということですね……。（ベッドの端になにげなく腰を下そうとする）

女ー　（やかましく）そんな所に坐らないで下さい。患者さんが来た時に、すぐ困るんですから……。

男ー　（あわてて立ち上って）すみません……。

女ー　こちらに、椅子があるじゃありませんか……。

男ー　いや、失礼……。（椅子に腰を下しながら）実は私、さっきはあんなこと言いましたが、このところ少し、食欲がなくなりましてね……。

女ー　年ですよ……。

男ー　何ですか……？

女ー　年のせいです。十代や二十代じゃないんですからね、何を食べてもおいしいってわけにはいきませんよ……。

男ー　まあ、そりゃあそうですが……。でも、私、そんなにふけて見えますか？

女ー　いくつです？

男ー　四十二ですが……。

女ー　四十二ね……。（ノートを開いて、ボールペンを持って）お名前は……？

男ー　いやいや……（と立ち上って）私、そういうつもりであれしたんじゃないんですよ。よして下さい、

私は別に……。

女ー　でも……食欲がないんじゃありませんか……？

男ー　ええ、まあ……そりゃあ、ないといえばないんですが……。でも、たいしたことじゃないんでしょう、それは……？

女ー　もちろん、たいしたことじゃありません。（あっさりノートを閉じて）よくあることですよ。夜は良く眠れるんですね……？

男ー　ええ……と、それも実は、あれなんですが……。いや、眠れることは眠れるんですよ。グッスリ眠るんですが、その……時々、夜中にフト目を覚ましたり、するんです……。

女ー　毎日ですか……？

男ー　え……？

女ー　毎日なんですか、夜中に目が覚めるのは……？（小さな紙切れにそれとなくメモする）

男ー　いやいや、毎日なんかじゃありませんよ。そんな、あなた……。そうじゃなくてですねえ……。

女ー　三日に一度くらい……？

男ー　三日に一度……？　いや……。（考えながら再び椅子に坐る）そうじゃなくてですね……。一週間に一度か……。

女ー　目が覚めないで済む日がですね……？

男ー　何ですか……？

女ー　目が覚めないで済む日が、一週間に一度なんでしょう？

男ー　ええ、まあ……そう……だなあ。

女ー　それじゃ、ほとんど毎日じゃありませんか、夜中に目が覚めるのは？
男ー　いや、だって……そうじゃない日もあるんですよ。
女ー　駄目ですよ。こういうことは正直に言わないと……。
男ー　（ムッとして）正直 に言ってるじゃないですか。何を言ってるんです、あなたは。私は、そうですよ。言いましたよ。一週間に一度は、そうじゃない日があるって、言ったじゃないですか。
女ー　いいです……。でも、そういう日は、それからどうするんです……？
男ー　そういう日って……？
女ー　夜中に目を覚ましてしまった日ですよ。そのまま朝まで起きているんですか……？
男ー　ええ、まあ……。
女ー　そして、そのまま出勤なさるんですか……？
男ー　そうです……。
女ー　奥さんは御存知なんですね……？
男ー　いや……。
女ー　何故？
男ー　何故って……。話してませんからね。
女ー　どうして話さないんです……？
男ー　だって、話すほどのことじゃないと思いましたし……。それに、そんなたいしたことじゃないでしょう、それは……？
女ー　奥さんと、何かあるんですか……？

男Ｉ　何かって？
女Ｉ　ですから……そういうことを普通に話しあえないような、何か……。
男Ｉ　ありませんよ、そんなもの。あるわけないじゃないですか。私たちは、普通の……普通のあれなんですから……。ほかのあれと、同じようにやってるんです……。

この頃、浮浪者風の男２が、ぼんやりと現われて、あたりにたたずむ……。

女Ｉ　でも……あなたまだ、何か隠してますね……。
男Ｉ　何ですって……？
女Ｉ　何か隠してますよ、あなたは……。
男Ｉ　隠す……？　私が……？　だって……何を言ってるんです、あなたは……？　そんなことするわけないじゃないですか。そうでしょう？　あなたに、別に、隠してどうってことじゃないんですから……。
女Ｉ　そうですよ。それなのにどうして隠すんですかって、私は聞いているんです……。
男Ｉ　何を……あなたは……。（立ち上って）冗談じゃないですよ……。
男２　（男Ｉが立ち上ったので）あの……もういいんですか……？
男Ｉ　（男２に気付き）ああ、失礼……。いいんです……。私は違うんですから……。
女Ｉ　（男２に）駄目よ、あなたは。
男２　カンゴフさん、頼みますよ、ひどく苦しいんです……。
女Ｉ　（立ち上って）駄目だって言ってるでしょう。何度言ったらわかるの。

男２　胸がムカムカするんです……。
女１　（出てきて）あっちへ行ってしまいなさい。いつまでもこんな所にウロウロしてたら、警察を呼ぶわよ。（男１に）あなた、坐っててて下さらなくちゃ困るじゃありませんか。
男１　（気押されて）すみません……。（と、思わず椅子に坐ったものの）でも、私はもう、あれなんですけど……。
女１　いいんです。この人は違うんですから……。そうしてないと、椅子とられちゃうんですよ……。（席にもどる）
男１　しかしねえ……。
男２　（オズオズともうひとつの椅子に近づいて）それじゃ、カンゴフさん、私ここで待たせてもらって……。
女１　駄目。駄目よ。言ったでしょう。（男１に）あなた、そっちへも坐って下さい。
男１　こっちへもって……だって、そんなこと出来ませんよ……。
女１　それじゃ、こっちにはカバンを置いとけばいいじゃありませんか。
男１　そうですか……。（男２に気をつかいながら、カバンを置く）

男２、うめきながら、そこにうずくまる。

男１　でも……この人、本当に苦しそうですよ……。
女１　苦しくなんかありません。嘘ですよ。いつもなんですから……。

男Ｉ　（のぞきこんで）大丈夫かなあ……。脂汗が出ているみたいですけど……。
女Ｉ　近づかないで下さい。うつりますよ。
男Ｉ　うつるって……？ それじゃ、やっぱり、病気なんじゃないんですか……？
女Ｉ　いいえ。病気じゃありません。でも、近づかない方がいいんです。（男２に）本当よ。いいかげんにどっかへ行ってしまわないと、ひどい目にあうわよ。（男Ｉに）それじゃ、注射でもしておきましょうか？
男Ｉ　え……？ 注射を……？
男２　（起き上って）チューシャ、お願いします、カンゴフさん……。胸が苦しいんです……。息が出来ないんです……。
女Ｉ　（男２に）あなたじゃないのよ、馬鹿ねえ……。（男Ｉに消毒用の脱脂綿を渡して）これで、腕を消毒して下さい……。
男Ｉ　さっきも言いましたように、私は別に……。
女Ｉ　でも、食欲がないんでしょう？ いいですから、早く上着を脱いで……。
男２　苦しいんです、カンゴフさん……。本当ですよ……。ここんところが……。どうしようもないんです……。
女Ｉ　うるさいって言ってるでしょう。（男Ｉに）袖をまくって、これで消毒するんです。丁寧にですよ、バイキンが入るといけませんから……。
男Ｉ　（消毒しながら）しかしなあ……。
男２　カンゴフさん、チューシャ、お願いします……。チューシャ……。

男１　何となく、あの人に、悪いことをしているみたいな気がして……。
女１　そういう、下らないことにクヨクヨするところが、あなたの欠点なんです。（注射をする）自分の体じゃありませんか
男１　（ちょっと痛みをこらえて）まあ、そうなんですがね……。
男２　カンゴフさん、チューシャ……。
女１　あと、それで軽く押えておいて下さい……。
男１　わかりました……。（手に持った脱脂綿で押える）
男２　カンゴフさん……。
男１　でも、これ何の注射です……？
女１　そうね……。（机の上のアンプルを取り上げてみて）何だったかしら……。
男１　何だったかしらって、あなた……。
女１　うるさいこと言わないで下さい。あなたは少くとも、注射してもらえたんですから……。（アンプルをクズ箱に捨てて）何か……かゆみ止めか何かですよ……。
男１　かゆみ止めって……。私は、かゆくなんかないんですよ。
女１　いいんですから……。
男２　かゆみ止め、やって下さい、カンゴフさん……。私も、かゆみ止めでいいですから……。（女１に近づく）
女１　みなさい。あなたがそんなことを言うから、この人まで羨しがって……。よしなさい。あなたは駄目って言ってるでしょう。（男２を突きとばす）

男１　でも……（腕をもみながら）大丈夫なのかなあ……。
女１　大丈夫です。これは副作用なんかありませんから……。
男１　副作用がないからって、あなた……。
男２　（うずくまったまま、うめくように）カンゴフさん、かゆみ止め……。チューシャ、頼みます。
男１　何か、このあたり、ふくれてきたみたいな気がしますけど……。
女１　動いちゃ駄目ですよ。動くと薬が散るんですから……。
男１　薬が散るとどうなるんですか……？
女１　どうなるかって……。散らない方がいいんです。これは、そういうもんなんですから……。
男２　カンゴフさん、チューシャ……。
女１　おさまるまで（ベッドを示して）ここに横になっていて下さい……。
男１　え……？だって、そんなに大変なもんなんですか、これ……？
女１　そうじゃありませんよ。そうじゃありませんけど、用心にこしたことはないじゃありませんか？
男１　まあ、そりゃそうですけど……。（ベッドに横に……）
女１　靴、脱いで。靴……。
男１　え……？
女１　靴ですよ。靴、脱がなくちゃ駄目じゃないですか。
男１　あ、失礼……。（靴を脱ぐ）
女１　ベッドに乗る時に靴を脱ぐなんて、常識じゃありませんか。本当に……。あなた、入院した
　ことないんですか……？

男ー　いや、一度だけあるにはありますけどね……。盲腸の手術で……。
女ー　あなた、盲腸なんです か？
男ー　いやいや、そうじゃなくて……。それはもう直ったんです。その時、手術してとっちゃいま
したから……。
女ー　でも、一度手術したからって安心は出来ませんよ……。
男ー　だって、とっちゃったんですよ、私のは……。
女ー　いえ、私の知っている人で、一度手術してとっちゃったにもかかわらず、もう一度なった人がいま
す。盲腸にですよ。わかりますか。だからその人には、二本あったんです、盲腸が……。痛むんですか？
男ー　いやいや、違いますよ。痛むなんて言ってやしないじゃないですか。私はただ、入院したことがある
かって言うから、盲腸の手術をした時に入院したことがあるって……。
男２　モーチョーです……。カンゴフさん、ひどく痛むんです……。
女ー　（男ーに）それならいいんです。ただ盲腸なら、早ければ早い方がいいですからね、手術するのは…
…。（水差しからコップに水を入れて）これ、飲んでおいて下さい……。
男ー　何ですか、これは……？
女ー　水ですよ……。
男ー　どうして水なんか飲むんです……？
女ー　あなたねえ、生意気なこと言うんじゃありませんよ。あなた、いくらかでも医学の知識があ るんで
すか？ ないんでしょう。それだったら黙って私の言う通りやって下さい。私は看護婦ですよ。専門家で
すよ……。

男Ｉ　わかりましたよ……。
男２　水……。カンゴフさん……。私にも水、下さい……。
女Ｉ　（男２に）うるさいわねえ、本当に……。ここはあなたのベッドじゃないって、さっきから言ってるでしょう？
男２　ベッドじゃないんです。水です。カンゴフさん……。水、下さい。のどが、焼けつくみたいなんです……。
女Ｉ　駄目よ。
男２　ちょっとでいいんです。ほんの、ひと口……我慢出来ないんです……。
女Ｉ　いいかげんにしないと、本当に痛い目にあうわよ。（男Ｉに）早く飲んじゃって下さい。見せびらかしてないで。取られちゃいますよ。」
男Ｉ　はい……。（あわてて飲んで、むせる）
男２　カンゴフさん……。
女Ｉ　（男２に）しようがないじゃないの。この水は、この人の分だったんですから……。（男Ｉに）あなた、全部飲んじゃったんですか……？
男Ｉ　いや、だって……あなたに飲めって言われましたから……。
女Ｉ　いえ、いいんです。そのことで、別に、あなたを責めてるわけじゃありません。（男２に）　そうでしょ。この人は、自分の水を自分で飲んだだけなんですから。あなた、何するの？

男２、ベッドの下に置いてあった男Ｉの靴をつかむと、そのまま走り去る。

男Ｉは、当初、何があったのか、わからない。

女Ｉ　あなた、駄目よ。そんなことしちゃ……。
男Ｉ　どうしたんです……？
女Ｉ　靴ですよ……。
男Ｉ　靴がどうしたんです……？
女Ｉ　持ってっちゃったんですよ、彼が……。
男Ｉ　持ってっちゃったって……。（見て、はじめて靴のなくなっていることに気付く）でも、どうして……？
女Ｉ　だから、言っといたじゃありませんか。靴、そんな所に置いといたら不用心ですよって。手に持ってるか、枕の下に隠しといた方がいいですよって……。
男Ｉ　いえ……だって、そんな風なことは、聞かなかったような気がしますが……。
女Ｉ　聞かなかったとしても、常識でしょ、そんなことは。ここはオーキューキューゴショですよ。ビョーインじゃないんですよ。いまどきは、大病院の個室にいる人だって、靴はベッドの中で抱えたまま寝るんです……。どうします……？
男Ｉ　どうしますって言われても……。そりゃあ、困ったなあ……。
女Ｉ　遠いんですか、お宅は……？
男Ｉ　いや、遠くはありませんが、それでも、裸足で歩いてくってわけにはいきませんからね……。
女Ｉ　飲ましてあげればよかったんですよ、ひと口ぐらい……。あんなに欲しがっていたんですから……。

男Ｉ　いやいや、それは違いますよ。だって、あなただってそんなこと言ってやしなかったじゃないですか。とにかく、早く飲んでしまえって……。
女Ｉ　私は、見せびらかすのはやめて下さい って言ったんです。
男Ｉ　私は別に、見せびらかしていたわけ じゃありませんよ……。
女Ｉ　あなたが手に持って、いつまでも飲まないから、彼が欲しがったんじゃありませんか……。
男Ｉ　それは、だって、あなた……。（あきらめて）まあ、いいですよ。そんなこと、ここで言い合ってたってしようがない……。
女Ｉ　何か、予備の履物かなんか、持ってないんですか……？
男Ｉ　予備の履物なんか、持ってるわけないじゃないですか。何を言ってるんです。そんなもの、いちいち持って歩いている人なんていませんよ。
女Ｉ　それじゃ、盗(と)られた時はどうするんです？
男Ｉ　盗られた時って……。あんなもん、めったに盗られることなんてないんです。しかし、あいつ、何であんなもん持っていったんだろう……？ もうだいぶオンボロになっていましたからね……。
女Ｉ　復讐ですよ……。
男Ｉ　何ですか……？
女Ｉ　彼はあなたに復讐しようとして、やったんです。別に、靴が欲しかったわけじゃありません。あなたを困らせて、それで復讐しようとしたんです……。
男Ｉ　だって・・・何故私が復讐なんかされなくちゃいけないんです……？ 私は彼のことなんか、なんにも知らないんですよ。

女ー　忘れたんですか。あなたは、彼のための注射をしてしまったじゃありませんか……。
男ー　何ですか……？それじゃあれは、彼のための注射だったんですか？
女ー　違いますよ。あれは、あなたのための注射です。でも、彼の方はそう思ってないんですから……。
男ー　思ってないって……。思ってないんだったら、思うように言ってくれなくちゃ困るじゃありませんか。
女ー　言いました。言いましたよ、私は。これは彼のではなくてあなたの注射だって、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、何度も言ったんです。そうでしたでしょう？ その点で、私の手落ちはないはずです。
男ー　（気押されて）そりゃまあ、そうでしたけど……。
女ー　何でも人のせいにするのはよして下さい。自分の不注意を棚にあげて……。
男ー　しかしなあ……ともかくそれは誤解なんだから……。何とかそのことを彼に言ってやることは出来ないんですか……？
女ー　ベッドだってそうですよ……。
男ー　ベッドが、何ですか……？
女ー　そこは彼の寝る所だったんです。それをあなたが取ってしまったから……。
男ー　何を言ってるんです。あなたが寝ろって言ったから寝たんですよ、私は……。そうじゃなくちゃ、こんなところに寝るわけないじゃないですか。
女ー　だから、いいんです、それは……。これはオーキューキューゴショのベッドなんですから、あなたにも当然、これを使う権利があります。ただ、彼はそう思ってないんですよ。彼はこれを、自分のベッ

ドだと思ってるんです。それはしようがないでしょう。そんなこと思っちゃいけない、なんていうわけにはいかないんですから……。

男Ｉ　だけど、事実そうじゃないんだとしたら……。

女Ｉ　どうなんです……？　私が、患者さんをそのベッドへ寝かせる度に、これはあなたのじゃないんですよって彼に説明すべきだって言うんですか？　冗談じゃありませんよ。私は忙しいんです。それに、彼だって、説明してハイそうですかってわかるタイプじゃないんです。彼はもう、これがここに出来る以前から、自分こそここで救護されるべき病人だと信じていて、だからそれは自分のベッドであると信じ切ってしまっているんです……。だから気をつけて下さいよって、何度も言いましたでしょう？　そこに寝る人間は、誰であれ、彼にとっては、敵なんです……。

男Ｉ　しかし、そんなこと言ったって、あなた……。

男２が、ぼんやり現われる。

女Ｉ　あなた、黙っててて下さい。私がやりますから……。

男Ｉ　ええ、でも……。

女Ｉ　駄目なんです。慣れてるものがやらないと、こういうことは……。（男２に）こっちに来るのよ……。

男２　（オズオズと近付いてきて）チューシャ、やっていただけますか……？

女Ｉ　馬鹿なこと言わないで。靴はどうしたの？

男２　靴って……？どの靴ですか……？
女１　どの靴もこの靴もないでしょ。今、ここから持っていった靴よ。返しなさい。あれは、この救護所の
　ものよ。
男１　いえいえ、あなた……。
女１　（男１に）黙ってて下さいって、言っておきましたでしょ。今は私が話しているんですから……。
男１　そうですけどね……。
女１　（男２に）どこへ持っていったの？
男２　（指して）ですから、あそこの……。
女１　どこ……？（立ち上る）
男２　いえ、見えませんけどね、ここからは……。こう行って、こっちの……（手で説明して）こういうも
　のの下のところに……。
女１　（坐って）持って来るのよ……。
男２　持って来たら、チューシャ、やってくれますか……？
女１　何ですって……？
男２　いえ……ですから、その……持ってきたら、チューシャ、やっていただけますかって……。
女１　（ゆっくり、立ち上って）そういうコンタンだったの、あなたは？そのためにあんなことをして、
　それで私を脅迫しようっていうのね？
男２　そうじゃなくて、ただ私は……？
女１　注射してくれなくちゃ持って来ないって、なによその言い草は。え？そんなことで私がビクビクす

るとでも思ってるの？ ふざけたこと言うと、本当に承知しないわよ。いいわ。そんなこと言うなら私にも考えがあるんだから。いいって言ってるでしょ。あんな靴、いりません。（坐る）

男Ｉ　ちょっと、ちょっと待って下さいよ、あなた……。

女Ｉ　黙ってて下さいって言ってるでしょ、あなたは……。（煙草に火をつける）

男Ｉ　黙ってられませんよ。何を言ってるんです。だって、私の靴ですよ、あれは。靴がなくなっちゃったら、家へ帰れなくなるじゃありませんか。

女Ｉ　それじゃ何ですか、あなたは私に、この汚い取引に乗れって言ってるんですか？

男Ｉ　いや、そうじゃありませんよ。そうじゃありませんけど……。（男２に）ねえ、君……、それじゃ、こういうことにしたらどうだろう……？

女Ｉ　駄目ですよ。あなたは黙ってなくちゃ。こういうことには慣れていないんですから……。

男Ｉ　いえ、だって、ただ話してみるだけなんですよ……。

女Ｉ　いいです。でも、それじゃ私知りませんからね、どんなことになっても……。

男Ｉ　ただ話してみるだけじゃありませんか……。（男２に）ですからね、あなた、何か誤解してるんですよ……。私は別に、あなたのこと、何とも思ってやしないんです……。

男２　私だって 別に、何とも思ってやしませんよ、あなたのことなんか……。

男Ｉ　そうでしょう？ そうだと思ってましたよ。（女Ｉに）ね、そう言ってますよ、この人は……。

女Ｉ　（男２に）それじゃ、どうして靴なんか盗んでいったの？

男Ｉ　だから……、だからそれは間違いですよ、何かの……。（男２に）そうでしょう？ 何かの間違いでしょう？ だってあなたは私のこと、なんとも思ってないんですから……。ね、返してください……。あ

れは私のものなんです……。
男2　それじゃ、水、飲ましていただけますか、返したら……？
男1　水？　いいですとも。お安い御用ですよ。すみません、カンゴフさん、この人に水、一杯やって下さいますか……。
女1　どの水です……？
男1　どのって……？　そこの……。
女1　これは、このオーキューキューゴショのものです……。
男1　いや、それはわかっていますけどね……。
女1　あなたの分はもうありませんよ。さっき、飲んじゃったんですから……。
男1　まあ、そうですけど、いいじゃありませんか、一杯くらい……。
女1　（立ち上って）冗談じゃありませんよ。何ですか？　あなたは自分のあのオンボロの靴を取りもどすために、このオーキューキューゴショの財産を取引材料に使おうっていうんですか？
男1　そんな、大げさな問題じゃないでしょう……。
女1　大げさな問題です。これは重大問題ですよ。言っときますけど、ここにあるものは全部、オーキューキューゴショの財産なんです。ですからそれは、私が病人だと認めた患者さんに対して、その治療に必要なものだけしか、使えないんです……。
男1　わかりましたよ……。
女1　私が意地悪でこんなこと言ってるんだなんて考えないで下さいね。水一杯のことだって、そうなんです。どんな患者さんに、なんのために飲ましたかってことまで、いちいち報告しなければいけないんです

から……。

男1　わかったって言ってるじゃありませんか。いいですよ、それなら……。（男2に）ねえ、君……、だから、こうしよう……。（ポケットから財布を出して）靴持ってきてくれたら、私が、お金を払うよ……。

男2　お金を……？

男1　もちろん、そんな沢山じゃないよ。私だってそれほど余裕があるわけじゃないんだから……。

男2　どうしてお金くれるんです……？

男1　どうしてって……。（顔を上げ、ややぎこちない雰囲気に気づいて口をつぐむ）

女1　何てことを言い出すんです、あなたは……。

男1　いやいや……そういう意味であれしてるんじゃないんですよ、私は……。

女1　私だったら怒りますよ、本当に……。お金だなんて……。

男1　だから、そういうことで言ってるんじゃないって、言ってるじゃありませんか。私はただ、向うにあるものを持ってきてもらうんだから、そのためのお礼の意味で、ほんの気持ちだけ……。

女1　盗まれたんですよ、あなたの靴は。それを取りもどすのに、どうしてお金を払うなんて言うんです？

男1　だから、それは……。

女1　（男2に）あなただってそうじゃないの。返すからお金をくれなんて、何よ、意地汚い……。

男2　そんなこと言ってやしないじゃないですか。言ってませんよ、私は……。

女1　言ってなくたって、あなたがいつまでもそんな所に、もの欲しそうに立っているから、この人がそう考えるのよ。（男2をこずいて）恥ずかしいと思いなさい。恥ずかしいと……。あなたは今、この人に侮

辱されたのよ。ツバをひっかけられたのよ。
男１　そうじゃありませんよ。あなた、よして下さい。そうじゃないってことは、今、説明したじゃありませんか……。
女１　（さらにこずいて）どうするの？　そんなこと言われて、あなた、黙ってるつもり？
男１　待って下さいよ、あなた……。
女１　（こずきながら）持ってくるのよ、あの靴を。今すぐ。そしてこの人に突っ返してやりなさい。お金なんか要らないからって。いいわね。わかったの？
男２　わかりましたよ……。
女１　それじゃ、行きなさい……。
男２　ええ、行きますけど……。
女１　何なの……？　隠した場所がわからなくなったの……？
男２　いえ、そうじゃなくて……、私が行ってる間に、この人が逃げてしまうんじゃないかって……。
女１　逃げるわけないじゃないの。何言ってるの、馬鹿ねえ。私が見張っててあげるわよ。
男２　でも……。
女１　（男１に）あなた、逃げないでしょう？
男１　逃げやしませんよ。だって……どうしてそんなこと言うんです……？
女１　（男２）逃げないって言ってるわよ。だから、いいでしょう。早く持って来なさい。いつまでもグズグズしていると、もう一度痛い目にあうわよ。
男２　（逃げて）だけど、もし私が靴を持ってきて、この人がいなくなっていたら、馬鹿みたいですよ…

…。

男１　何故です？　何故この人は私が逃げるなんて言うんです？

女１　知りませんよ、そんなこと。（男２に）行きなさいって言ってるでしょう？　本人が逃げないって言ってるんだから、いいじゃないの。

男２　ただ言ってるだけじゃないですか……。

女１　それじゃどうしろって言うの、いったい。その上、私がここで見張っててあげるって言ってるのよ、逃げないように……。

男１　あの、ねえ……よくわからないんですが……。

男２　私はただ、わざわざあそこから靴を取ってきて、ここへ来てみたら、この人が逃げて、もうここにはいなかったなんてことになったら……いやだなあって、そういうことを言ってるだけなんですから……。

女１　わかったわよ。それならこの人のズボンを預っていけばいいじゃないの。ズボンなしじゃ、この人だって逃げるわけにはいかないんだから。いいわね。（男１に）あなた、ズボン脱いで下さい……。

男１　ズボンて……？　このズボンですか？

女１　そうです。そして、この人に渡してやって下さい。そうすれば、靴持ってくるそうですから。

男１　でも……そりゃあ、おかしいですよ……。

女１　ともかく、そうしておかなければ、あなたが逃げてしまうんじゃないかって、思ってるんです、この人は……。

男１　だから、それがおかしいって言ってるんですよ、私は……。どうして私が、逃げるんです？

女１　知りませんて言ってるでしょう、私はそんなこと……。（指して）少くとも、この人はそう思っちゃ

ったんです……。

男ー　思っちゃったって言ったって……。（つくづくと男2を見て）どうしてそんな風に思うのかなあ……。

女ー　お手伝いしましょうか……？

男ー　いやいや、自分で出来ますから……。（とバンドをゆるめかけて）でも、ちょっと待って下さいよ……。どうも私にはよくわからないんですがね……。

女ー　どうしたんです？

男ー　ですからね、私がこのズボンを脱いでこの人に渡しますでしょう？

女ー　そうしたら、この人が靴を持ってくるんです。それで万事解決じゃありませんか。いいかげんにして下さいよ。私、いつまでもこんな下らないことでガタガタしたくないんです。あなた、パンツはいてないんですか？

男ー　いや、はいてますよ。

女ー　なら、いいじゃありません か。早いとこやって下さいよ。

男ー　（脱ぎながら）私は別に、そういうことで、あれしてるわけじゃないんですから……。ただ、どうして私が逃げるなんて、思うのかって……。（ズボンのポケットから財布を取る）

女ー　何ですか、それ……？

男ー　いや、財布ですよ……。（脱いだズボンを、女ーに渡して）それじゃ、これ……。

女ー　（受け取って）お財布入れとくと、あの人に盗られるかもしれないって、考えたんですね……？

男ー　そうじゃありませんよ。何言ってるんですか。私はただ……。

女ー　いいです。本当に……、あなたって人は、人の善意ってものが信じられない人なんですから……。
男ー　違いますよ。私は、そういう意味でしたんじゃないんです。本当ですよ。ズボンの中にそういうものがあったら、かえって気にするんじゃないかと思って、それで私は……。
女ー　いいって言ってるじゃありませんか。（男２に）ほら、これ持っていって。靴持ってくるのよ、すぐ……。
男２　わかりました……。（ポケットなどを触ってみて）もう何も入ってないんですね……？
男ー　ええ……。ですからね、そういうつもりであれしたんじゃないんですから、気を悪くしないで下さいよ……。
女ー　早く行きなさい……。
男２　はい……

男２、ズボンを持って、去る……。

女ー　本当に……。私だって困るんですからね、あなたにいつまでもそんな所に寝てられたら……。いつ患者さんが来るかわからないんですから……。
男ー　そりゃそうですけど……。だって、しようがないでしょう。こういうことになってしまったんですから……。
女ー　あなたがちょっと用心してれば、こんなことにはならなかったんです……。
男ー　しかし、どうも私にはよくわからないんですがねえ……。どうして私がここで、あいつにズボンを渡

してやらなければいけないのかってことが……。
女ー　まだそんなことをグズグズ考えてるんですか？　よして下さいよ、もういいかげんに……。あなた、血圧測ってみます？
男ー　血圧を……？　いや、いいですよ……。何故ですか……？
女ー　何故ってことはありませんけど……。これ、最新の血圧計なんですよ、私、まだ一度も使ってみたことがないんです……。じゃあ、バリュウムか何か、飲んでみますか……？
男ー　バリュウムなんて飲んだってしようがないじゃないですか。だってここにはレントゲンなんてないんでしょう？
女ー　でも、すぐに下剤を飲んどけば大丈夫ですよ。副作用なんて、なんにもないんです……。
男ー　いやですよ……。ともかく、私は病気でもなんでもないんですから……。だけど。カンゴフさん……今ちょっと思いついたんですけど、あいつ、本当に持ってくるんでしょうねえ……。
女ー　持ってくるって、何をですか……？
男ー　何をって、靴ですよ。それを持ってくるって言うから、私、ズボンを渡したんじゃないですか。
女ー　持ってきますよ……。だって、そういう約束だったんでしょ？
男ー　約束って……、まあ、そう言ってはいましたけど……。
女ー　ハッキリ約束したんじゃないんですか？
男ー　だって……私は知りませんよ。私はただ、あなたがズボンを脱げって言うから……。
女ー　私がズボンを脱いで下さいって言ったのは、あなたがそれを靴と交換するって言うから、それなら……。

男ー　交換って……。交換ってなんですか？そうじゃありませんよ。だって……そりゃあ違うでしょう。
　あいつが靴を取りに行っている間に、私が逃げると困るから、その間だけズボンを預るって、確かにそう
　いう話だったんですよ。
女ー　あの人が靴を取りに行っている間に、どうしてあなた、逃げるんです……？
男ー　いや、だから、逃げやしませんよ。私は逃げるつもりはありませんでしたけど、あいつが、そう思っ
　ちゃったんじゃないですか……。
女ー　だいたい、おかしいと思いません？　あなたの靴を持ってくるって言うのに、その間にあなたが逃げ
　ちゃうかもしれないなんて……。
男ー　だから、おかしいですよ。おかしいって、私、何度も言ったじゃないですか……。
女ー　それじゃ、どうしてズボンなんか渡してしまったんです……？
男ー　どうしてって……。そりゃあ、だって、あなた……。参ったなあ……。そうするとあいつ、あのズボ
　ン、もらったつもりでいるんですか……？
女ー　私が知るわけないじゃないですか、そんなこと。いいかげんにして下さいよ。私はただ、あなたと彼
　との取引の仲介をしただけなんですからね。
男ー　（立ち上って）大変だ、これは……。
女ー　なんて格好 です。寝てて下さい。ここはオーキューキューゴショですよ。
男ー　しかし、あなた……。（ベッドに寝て）あいつ、もう絶対帰ってきませんよ。私は、靴とズボンと、
　両方盗られてしまったんです……。
女ー　私のせいじゃありませんよ……。

男Ｉ　だけど……どうなるんです、私は……？　このままじゃあ、どうしようもありませんよ……。

医者の白衣を着た男３が、自転車に乗って忙しそうに現われる。

男３　何をガタガタやってんだ、君はまた……。言っといたろう？

女Ｉ　すみません……。

男３　すみませんじゃないよ、本当に……。君はいつだってこうなんだから……。何度言ったらわかるんだろうねえ……。カンゴフ、何年やってんだいったい……？　そうだろう？　私だって忙しいんだからね、いちいち面倒起すのはよしてくれよ。ちょっと目をはなすと、必ず患者と、何や彼や、イザコザを起して……。

女Ｉ　でも、この人は患者じゃありませんよ。

男３　だから、そういう口のきき方がいけないって言ってるんだよ、私は……。患者じゃなければイザコザを起してもいいってわけじゃないんだから……。なんだい、この机の上は……？　私がいつもなんて言ってる？　机の上だけはいつもキチンとして、いつ誰がきてもみっともなくないようにって、口がすっぱくなるほど……（ふと男Ｉに目がいって）これ、患者じゃないって……？

女Ｉ　ええ……。

男３　それじゃ、　どうしてこんなところに寝てるんだ……？

男Ｉ　あの……。

女Ｉ　この人、ズボン、はいてないんです。

男３　ズボン、はいてない……？（シーツをそっとめくってみて、おろす）本当だ……？　どうしたんだろう……？

女１　ですから私、本当は患者さんが来た時に困るから、ベッド空けてもらいたいと思ったんですけど、そうもいかなくて……。

男３　最初からはいてなかったのかね……？

男１　いえ、そうじゃないですよ。最初はちゃんとはいてたんですから……。それを、あの……。

男２、靴をぶら下げて、ぼんやりと現われる……。まだ、苦しそうである。

男２　あの……この靴でしたか……？

男１　ズボンはどうしたんだ。ズボンは？

男２　ズボン……？

男１　ズボンだよ。だから、君がそれを取りにいってる間に、私が逃げると困るからっていうんで、ズボン預けたろう？

男２　ズボンも返すんですか……？

男１　何言ってんだ。当り前じゃないか。そういうことで預けたんだから、そうだったでしょう、カンゴフさん？

女１　私は知りませんよ……。

男１　知らないはずないじゃありませんか。あなただって、その場にいたんですから。（男２に）駄目だよ、君……。ズボン持ってこなくちゃ……。カンゴフさん、つかまえといて下さいよ、その人……。逃げられちゃったら、あと、どうしようもないんですから……。ねえ、カンゴフさん……。

男３　ちょっと待ちなさい。困るじゃないか、こういうところでそんなことはじめられちゃあ……。どういうことなんだね、いったい……？（男２に）その靴は、この人のものかい？

男２　ええ、ですから、そうじゃないかと思って、返しに来たんです……。

男３　じゃ返せばいいじゃないか、グズグズしてないで。何やってんだいったい……。その代り、君、ズボンもらったんだろう……？

男１　そうじゃないですよ。そうじゃないってことを、今、説明したばっかりじゃありませんか……。

男３　ズボンも返すのかね……？

男１　だって……そうですよ。それは、一時預けといただけなんですから……。

男３　それじゃ、この人のもらえるものは何もないじゃないか……？

男１　何もないって……。そりゃそうですけど……。だけど、しようがないでしょう、それは……。ズボンだって、靴だって、もともと、私のものなんですよ。

女１　（男２に）それじゃ、あなた、靴もらえばいいじゃないの、ズボン返して……。

男１　駄目ですって……。何を言ってるんですか。冗談じゃないですよ。靴もズボンも駄目です。それは全部、私のものなんですから……。

男３　まあまあ……。そりゃあ、君の気持もわからないではないけどね……。

男１　私、別に欲張りでこんなこと言ってるんじゃないんですよ。何度も言うようですが、靴もズボンも、

もともと私のもんなんですから……。私のものを私に返してくれっていうのは、これは、普通の……あたりまえのことですよ、これは……。

男3　わかったって言ってるだろう？　大声張りあげるのはやめたまえ。ここをどこだと思ってるんだ。仮りにもオーキューキューゴショだよ、君……。（女ーに）この患者の血圧、測ってみたかね……？

女ー　いえ……。だって、いやだって言うんです……。

男3　（男ーに）気をつけた方がいいよ、年なんだから……。わかった。君の言いたいことはもうわかったんだ。（男2に）だから、おい、君、何か言ってごらん……。今度は、君の方の要求を聞こう……。

男ー　そいつに要求なんてありませんよ。だって、そいつが何を要求出来るって言うんです……？

男3　何を言ってんだ、君は……。こいつには、口もきかせないって言うのかね……？

男ー　いえ、そうじゃありませんけど……。

男2　チューシャして下さい、センセイ……。

男3　何だって……？

男2　チューシャです。して下さい、苦しいんです……。

男3　チューシャ……？

女ー　さっきからそう言ってるんですよ、その人は……。

男3　どういうわけなんだ、チューシャしてくれなんて……。

女ー　ですから私は、それは違うって言ってるんです。この人は少くとも靴を返してもらうわけですから、その代りに何かしてやっても当然ですけど、私たちは別に、何も返してもらうわけじゃないんですから……。

男３　そうだよ。（男２に）聞いたろう、君……？ それは問題のスリカエってもんだ……。君は、彼に靴を返すんだから、彼からもらわなくちゃ駄目だよ、その見返りは……。

男１　見返りって、何ですか……。

女１　黙って、あなたは……。

男３　（男２に）だから、彼に出来ることを頼まなくちゃいけないよ。出来ないことをいくら頼んだって……。おい、どうしたんだ、君……？

男２　苦しいんです……。

男３　苦しいのはわかってるけどね、駄目だよ、ここんところはよく聞いとかなくちゃ。大事な話なんだからね。おい、君……。聞こえてるのか、私の言ってることが？

男２　チューシャ、して下さい……。

男３　チューシャは駄目だって言ってるだろう。問題が違うんだよ、問題が……。彼はチューシャなんか持ってないんだから……。（男１に）持ってないんだろう？

男１　持ってませんよ。

男３　（男２に）ね、持ってないんだから……。おい、君……。どうして私の話を聞こうとしないんだ……。おい……。どうしようもないよ、そんなことじゃあ……。

男１　でも……その人本当に苦しいんじゃないんですか……？

男３　苦しいのはわかってるって言ってるだろう……？ それじゃ、君の方から言ってやったらどうなんだ……？

男１　何をですか……？

男３　何をですかじゃないよ。靴を返してもらうんだからね、君は。そのかわりに、何かしてやれることはないのかね、彼に……。

男１　してやれることって言っても……。

男３　現にこうやって苦しんでいるんじゃないか……。見てられないよ、本当に……。

女１　彼、この人のこと恨んでるんです。注射も水もベッドも、みんな彼のものをこの人が取っちゃったって思ってるんです……。

男３　それじゃ、なおさらじゃないか。おい、どうなんだ、君……？

男１　どうなんだって 言ったって……、それは、彼が勝手にそう思っただけなんですから……。

男２　助けて下さい、センセイ……。

男３　私に言うなって言ってるだろう？ 私は違うんだから。私が君に、何をしたって言うんだ？ …… 彼だよ、やったのは……。

男１　違いますよ。何を言ってるんです、あなたは。私はただ、ここを通りかかって、いやだって言うのにチューシャさせられて、ベッドに寝かされて、欲しいとも何とも言わないのに、水を飲ませられて……。

男１の台詞の途中で、男２立ち上り、椅子の背にかけてあった男１の背広の上着とカバンとコーモリ傘を素早く取って、走り去る。

男３　おい、何をするんだ……？

女１　駄目よ、あなた……。

男Ｉ　どうしたんです……？
女Ｉ　持ってっちゃったわ……。
男Ｉ　持ってっちゃったって……。　またですか……？
女Ｉ　またですかって、そういう言い方はよして下さいよ。私、さっきから何度も言っときましたよ、用心して下さいねって……。
男Ｉ　何とかして下さいよ。どうなるんですか、私は……？
男３　いやいや、よく考えてみると、あれだね……。だから、ここにあったものはみんな、彼のものなんだろう？
女Ｉ　そうですよ……。
男３　だからさ……。奴は靴を返すかわりに、それをもらってこうってつもりなんだ。だって、ほら靴は置いてったよ……。
女Ｉ　本当……。その点は良心的ね。（と、靴を取り上げ、男Ｉのところへ）あなた、靴は返ってきましたよ……。
男Ｉ　冗談じゃないですよ。何が良心的なんですか。その代り私は、ズボンと上着とカバンとコーモリ傘を持っていかれたんですよ。（受け取った靴を、地面に叩きつける）
男３　（拾って）君、人の善意を踏みにじるようなことをしちゃいかんよ……。
男Ｉ　善意って何です。それじゃ、私のズボンと上着とカバンとコーモリ傘を持っていったのは、あいつの善意だって言うんですか？
男３　そうじゃないよ。こいつを置いてったことを言ってるんじゃないか、私は。これだって、君、その気

になれば持ってくことだって出来たんだよ……。

男Ｉ　忘れたのかもしれないじゃないですか、持ってくのを……。（男２が、忘れた靴を取りに来る）ほら、取りに来ましたよ。（男２、走り去る）つかまえて下さい、カンゴフさん。追いかけて下さい……。（立ち上って）駄目ですよ、逃がしちゃあ……。私の……私のあれはどうなるんです……。

女Ｉ　しようがないでしょう？ 来たと思ったらもう行っちゃったんですから……。

男Ｉ　追いかけて下さいよ。まだその辺にいるんじゃないんですか？

男３　君、坐ったらどうなんだ。なんて格好してるんだよ……。（自分もテーブルの向うに落着いて）言っとくけどね、奴は今、靴を取りに来たんじゃないよ。

男Ｉ　じゃあ、何しに来たんです？

男３　だから……何か返しに来たんじゃないのかな。たとえば、ポケットの中に財布か何か入ってたんで、それがなくちゃ困るだろうと思って……。（煙草に火をつける）

男Ｉ　そんなことありませんよ。財布はここにあるんですから……。

男３　ある……？

女Ｉ　さっき、ズボンを渡す時に抜きとったんです……。

男Ｉ　抜きとったって、何を言うんです。これは、私の財布ですよ。

男３　盗まれると思ったんだね、そうしとかないと……。

男Ｉ　そうじゃありませんよ。何度同じことを言わせるんです。私はただ、ズボンだけ渡せばいいんだと言われたから……。でも、いいですか、盗まれると思ったとしても、それはしようがないんですよ。だって現にその時そいつは、靴をカッパラっていったんですから……。（ベッドの脇に置かれた靴を見て）え…

…？これ、違うんじゃないかなぁ……。（手に取って見る）
男３　何だい……？
男Ｉ　これ、違いますよ。私の靴じゃありません……。
男３　どうして……？
男Ｉ　どうしてって、違うんですよ、とにかく……。ねえ、カンゴフさん、違うでしょう、これ……？
女Ｉ　さあ……、そんなことないんじゃありません？そんな靴でしたよ、私の覚えているのは……。
男Ｉ　違いますよ、だって、いいですか……。（はいてみる）
男３　はけるじゃないか……？
男Ｉ　はけますけど……、ほら、こんな、ぶかぶかじゃないですか……？
女Ｉ　何か詰めものをすればいいんですよ。センセイ、その机の抽出しに新聞紙か何か入ってません？
男Ｉ　待って下さい。そういうことを言ってるんじゃないんですよ、私は。これは私の靴じゃないってこと
　です。スリカエられたんです、彼に……。
女Ｉ　でも、新聞紙詰めれば、充分はけるんですよ。
男Ｉ　はけるかはけないかなんか、問題にしてるんじゃありません。奴は私の靴を持って来なかったんで
　す。そういうことを言ってるんですよ、私は……。
男３　しかしなあ、そこまで悪くとるっていうのは、どうなんだい……？
男Ｉ　悪くとるって……悪いんですから、事実……。だって、私の靴をカッパラっていって、返さなかった
　ってことなんですよ、これは……。
男３　いや、それはそうかもしれないけどね。

男ー　かもしれないじゃありません。これは事実です。ほら……（靴の間に指を入れてみて）見て下さい。
　こんなですよ……。指が二本も入るんです……。この間に……。
女ー　だから、新聞紙詰めろって、私、さっきから言ってるんです……。
男ー　明らかじゃないですか、これが私の靴じゃないってことは……。
男３　だけど君……、奴の言うことだって聞いてみなくちゃいけないだろう……？　奴にだって、奴の考え
　方ってものがあるんだから……。
男ー　（苛立って）考え方って、なんです。あいつはドロボーですよ。ドロボーの考え方なんて決まってる
　じゃありませんか。カッパラって、逃げるんです。それだけですよ。
男３　君、そういう言い方はよしたまえ。人を、そういう風に決めつけるのはよくないよ。そうだろう…
　…？
男ー　（ややひるんで）しかし、そう考えざるを得ないじゃないですか……。
女ー　現に、靴は返してもらえたんだし……。
男ー　（再びいきり立って）違うって言ってるでしょう。これは私の靴じゃないんです。
男３　しかし君、そうだとしても少くとも奴にだって、代りの靴を持ってきてやろうっていう親切心はあっ
　たんだから……。ね、そうだろう？　その気持は汲んでやらなくちゃ……。君はねえ、どうも人の悪
　い面ばかりを拡大して考える癖があるよ……。それじゃ、まわりの人間はやり切れない……。救われない
　よ……。ね、誰にだって、どこかしらいいとこってものがあるんだから……たとえドロボーでもだよ……
　もちろん私はまだ奴がドロボーだとは思ってないけど……万が一、奴がそうだとしても、そのことだけで
　非難するわけにはいかないんじゃないかなあ……。

男１　よして下さいよ……。（と、ベッドにひっくりかえって）それじゃ私はどうすればいいです？……
　このままここにじっとしてろって言うんですか……？
女１　もしかしたらあの人、靴を間違えたことに気がついて、取り換えにきたのかもしれないわ、今……。
男３　そうだ……。間違いないね……。私にはどうも、あいつにはそういう律儀なところがあるような気が
　してならないんだ……。
男１　何を言ってるんですか……。だって事実、靴なんか取り換えてかなかったじゃないですか……。
女１　あなたが大声出して追っぱらってしまったからですよ。そうじゃなくちゃ、ちゃんと取り換えていっ
たんです……。
男３　気が弱いんだ、あいつは……。そういう所があるんだよ、奴には……。
男１　靴なんか、持ってませんでしたよ……。
女１　あなたに見えなかっただけです。
男１　それじゃ、あなたには見えたんですか？
女１　見えませんでしたけど……。私にも見えなかったのかもしれないじゃありませんか。なんです、その
　言い方は……。それじゃまるで、私たちが悪いみたいに聞えますよ……。
男３　誰が悪いって……？
女１　私たちですよ。この人はそう思ってるんです……。
男３　（男１に）何故　私たちが悪いんだ……？
男１　いや、だって……そんなこと言ってやしませんよ、私は……。
女１　言ってやしなくても、思ってるんでしょう、心の中で……？

男１　思ってやしませんよ。何を言ってるんです。私は、ただ……。
男３　君ねえ、勘違いしちゃいけないよ。私たちはなんでもないんだから……。なんでもないにもかかわらず、親切で、今こうして君の相談に乗ってやっているんだからね……。
男１　わかってますよ……。
男３　悪いのは、奴なんだから……。いやいや、それほど悪いってわけじゃないけれども、もし万一、多少でも悪いところがあるとしたら、奴なんだ。私たちじゃないんだよ……。
男１　わかってるって言ってるじゃありませんか……。でも、どうすればいいんですか、私は……。この格好じゃ、帰るわけにもいきませんよ……。
女１　ですから、その言い方がおかしいって言ってるんですよ、私は……。そうでしょう？　帰れなくなったのはあなたのせいなんですから……。私たちはむしろ、親切で、あなたをそこに寝かしといてあげてるんですよ。そのことを忘れてもらっちゃ困りますねえ……。
男１　だって、私はただ、帰れなくなったなあって……そういう……事実をありのままに、言っただけなんですから……。
男３　まあ、いいよ……。じゃあ、せっかくだから、血圧でも測ってみるかい……？（女１に）血圧、まだ測ってみてないんだろう……？
女１　まだですよ。だって、測ろうとしたら、やだって言うんです、この人……。
男３　やだなんて、そういうこと言っちゃいかんよ、君……。（血圧計をいじりながら）血圧というのは、大切なもんだ。デリケートでもあるしね……。高ければ高いでいけないし、かといって、低ければいいかって言うと、そうでもない……。ちょうどいいのが一番いいんだが……どれくらいがちょうどいいかって

言うと、これまた、年齢によっても、体重によっても、色々と違いがある……。まあ、言ってみれば、なんだかよくわからないもんなんだね、血圧なんてものは……。（女Ｉに）これ、君、使い方知ってんのか……？

女Ｉ　いえ、知りません……。

男３　（男Ｉに）最新式でね……。私もよくやり方は知らないんだ……。じゃ、血圧はやめよう……。これは、なんだい……？

女Ｉ　バリュウムです……。

男３　もう飲ませてみたのか……？

女Ｉ　いえ……。それも、やだって言うんです……。

男３　なんでも、やだって言うんだねえ、君は……。医学をもっと信用しなくちゃいけないよ。こいつは、医学においても画期的な発明でね……つまり、胃のレントゲン撮影をする時にこいつを飲んどくとね、レントゲン光線をこいつが遮断するから、胃がシルエットになって、こう……見えてくるって仕掛けなんだ……。並みたいていの学問じゃあ、なかなか思いつけないことだよ……。もちろんだから、レントゲン装置がない場合はね、飲んでもしようがないんだが……。

女Ｉ　でも先生、あとすぐ下剤を飲んどけば、なんともありませんよ……。

男３　そりゃそうだけど……下剤はあるのかい……？

女Ｉ　あります。たしか、ここに……。

男３　よし、それじゃ飲んでみよう……。

男Ｉ　ちょっと、待って下さいよ、先生……。

男３　なんだい……？
男１　カンベンして下さいよ、もう……。
男３　カンベンしてくれって、それはどういう意味なんだ……？
女１　だから、そうなんですよ、先生……。その人はまだ、私たちが何か悪いことをしたって、思ってるんです……。
男３　どんな悪いことをしたんだ、私たちが……？
男１　悪いことしたなんて言ってやしませんよ。私はただ、病気でもなんでもないんですから、そんな変なことをするのはいやだって……。
男３　変なことじゃないよ、これは……。ただバリュウムを飲んでみようって、そう言ってるだけなんだから……。それにすぐ下剤も飲むんだよ。（女１に）下剤、あるんだろう？
女１　ありました。これです……。
男３　ね、あるんだから……。そうすれば、君のそのバリュウムは、そのまま出てきちゃうんだ。なんともないんだよ、君は……。
男１　だって、なんの役にも立たないんでしょう、そんなことしたって。いやですよ。
男３　なんの役にも立たないけどもね……。（ちょっと残念そうにバリュウムのビンを見て）いいじゃないか、ちょっと飲んでみるだけなんだから……。それに、あれだよ……。（女１に）そうなんだろう、君……。最近のバリュウムは、ひどく飲みやすくなったって言うじゃないか……。
女１　味がついてるんです。甘いんですよ。子供たちなんか、お代りを要求します……。
男３　お代りだよ、君……。もう一杯くれって言うらしいんだ……。これこそ医学の進歩ってものじゃない

かね……。

男１　ともかく、いやですよ、私は……。

男３　（あきらめて）それじゃいったい、何をしたいって言うんだね、君は……？

男１　何をしたいって……帰りたいんですよ、私は……。あれからもう、どのくらい時間たってると思います……？　家内だって心配してますよ……。

男３　しかし君、帰れないじゃないか、その格好じゃ……。

男１　だから……だから、困ってるんじゃありませんか……。

男３　その間に、ちょっとバリュウム飲んでみたっていいじゃないか。どうせヒマなんだから……。

男１　ヒマじゃないですよ。ヒマじゃありません、私は、言っときますけど……。すぐに帰らなくちゃいけないんです。ただ、帰れないからこうしているだけじゃありませんか……。

女１　それじゃ先生、バリュウムはやめて、下剤だけ飲んでもらったらどうでしょう。それなら、なんともないと思いますけど……。

男１　冗談じゃありませんよ。ふざけるのはよして下さい。

女１　私、ふざけてなんていませんよ。

男１　どうして私が下剤なんか飲まなくちゃいけないんです？

女１　だってあなた、バリュウム飲むのいやだって言うからじゃありませんか。

男１　私は、バリュウムも、下剤も、飲みません。

女１　じゃあ、何を飲むんです？

男３　よしなさい、みっともない……。いったいここをどこだと思ってるんだ、本当に……。（女１に）バ

リュウム飲まないのに下剤飲んだってしようがないよ。だって、バリュウム飲んでないんだからね、何が出てくるんだい……？

女ー　何か出てくると思いますわ、私は……。

男３　だって、バリュウム飲んでないんだよ。何も出てくるわけないじゃないか……？

女ー　でも、バリュウム以外の何かが……。

男ー　（うんざりして）もう、カンベンして下さいよ、本当に……。なんとかならないんですか、ここは……。

男２が、男ーの背広とズボンを着て、男ーのコウモリ傘をさして、カバンを持って、ぼんやりと現われ、そのままゆっくりと、舞台を横切る。

男ー、女ー、男３、唖然として、沈黙したまま、それを見送る……。

男３　何だ、あれは……？

女ー　彼ですよ……。この人のものを着てました……。靴も、カバンも、コーモリ傘も、この人のものです……。

男ー、胸を押さえて、ベッドの上にゆっくりと、倒れこむ……。

男３　どうしたんだ、君……？

男１　いえ……大丈夫です……。ちょっと、胸がムカムカして……。
女１　（のぞきこんで）顔色が悪いみたいですよ……。それに、何故かしら……汗かいてるんじゃありません……？
男３　水、飲んでみるかい、君……？　もしかしたら、ノドがかわいているのかもしれないよ……。
女１　でも、さっき飲んだんですよ、この人は……。この人の分は、もうないんです。
男３　そんなこと言ったって、しようがないじゃないか、この際なんだから……。そうだろう……？　こんな所に、いつまでもこんな風にされてたら、どうしようもないよ……。
女１　（渋々、水差しの方へ行きながら）そりゃそうですけど……。（指で量を示して）こんなに、沢山飲んだんですよ、さっきこの人は、ひとりで……。（コップに水を注ぐ）
男１　要りません。水は、いいですよ……。大丈夫です、ほんのちょっと……こうしてれば……。
男３　そんなこと言わないで、飲んでみればいいじゃないか……？　スッキリするよ。これはかなり思いがけない話なんだけどね、ビックリするほど効くんだ、水って奴は……。本当だよ……。
女１　（コップに半分ほど水を入れて持ってきて）どうするんです……？
男３　いや、だから、飲むんだよ……。（女１からコップを受け取る）
男１　いいですって、先生……。本当です。飲みたくないんです……。私は、なんともないんですから……。
男３　なんともないよ。だからこそ言ってるんじゃないか、私は……。ね、君は病気でもなんでもないんだ……。
男１　そうですよ……。ただ、ちょっと、今……。

男３　胸がムカムカするんだろう？だからそれは、ノドがかわいているせいだよ。ノドがかわいている時には、私の経験でもいつもそうだが、胸がムカムカするんだ……。だからね、この水を飲んで、スッキリして、そして、帰りたまえ……。

男１　帰れって……そんな。帰れるわけないじゃないですか……。

男３　帰れよ。帰れるんだよ、君は……。だって君は病気でもなんでもないんだからね。家は遠いのかい……？

男１　遠くはありませんけど……。

男３　歩いていけるんだろう……？

男１　そりゃ、そうですけど……。

男３　じゃあ、歩いてけばいいじゃないか。そうすれば帰れるよ。さあ、だから早いとこ、これ飲んで……。

男１　よして下さいよ、先生……。水は飲みたくないんだって、言ってるじゃありませんか……。

男３　何を怖がってるんだ、君は……？これはただの水だよ……。（女１に）何か入れたのかい？……

女１　いえ、入れやしませんよ……。

男３　ね、何も入れなかったって言ってるんだから……。（コップをすかしてみて）見ればわかるじゃないか、何も入ってないってことは……。（飲んでみて）え？（ペッと吐き出し）ひどくなまぬるいね、この水は……。

女１　あったまってるだけです。しばらくあの中に入ってましたから……。

男３　あったまってるだけだよ。その方が飲みやすいだろう？

男Ｉ　要りませんよ……。
男３　それじゃ、どうするつもりなんだ、君はいったい……？（コップを女Ｉに渡す）
女Ｉ　（受け取って）せっかく飲んでいいって言ってるのに……。（自分でちょっと飲んでみて、残りを水差しの中に返す）
男３　そのままそこに、いつまでも居るつもりなのかい……？
男Ｉ　そうじゃありませんよ。そうじゃありませんけど……どうしようもないじゃありませんか……。（苦しくなって）ともかく、ちょっと待って下さい……。ほんのちょっと、静かにさせといてもらえないんですか……。すぐ、直るんですから……。
男３　君はいいかもしれないけどね、こっちはどうなるんだ……？ 何度も言うようだけど、ここはオーキューキューゴショなんだからね……。君にいつまでもそんな所に寝てられたら、患者が 来た時に、さっそく困るじゃないか？ そうだろう？ 君はねえ、自分の都合のことしか考えてないんだ……。そのために相手がどれくらい迷惑してるかなんて、これっぽっちも、考えようとしないんだよ……。
男Ｉ　それじゃ、どうしろって言うんです、いったい……？ ともかく、このままの格好じゃあ、歩くことだって出来やしないじゃないですか……。
男３　だから、そのことだよ。そのことについて、私が何も考えてないと思うかね？ とんでもない。こう見えても私は医者だよ。もちろん、医者 であることはこの際あまり関係ないんだけどね……。この毛布さ。これを貸してやるから、これを腰んとこに巻きつけていけばいいじゃないか。そうすれば、君がズボンはいてないなんて、思わないよ。君は、平気な顔して、こうやって歩いていけるんだ……。だから、彼女にも、一緒についていってもらうよ。それならいいだろう？

女Ｉ　いやですよ、私は、そんな……。みっともない……。
男３　みっともないって……。君がみっともながる……？　みっともない、がる……？　みっともなく、思う……、ことはないだろう？　君がみっともないわけじゃないんだから。（苛立って）そうじゃなくてだなあ……。君もわからないねえ……。私たちは彼に毛布を貸してやるんだよ。彼がそれを借りていって、家に帰って、それから奥さんなり本人なりが、どうもありがとうございましたって……だから、返しに来ない場合だって考えられるよ……。
女Ｉ　そりゃそうですけど……。
男３　それに、あれじゃないか……。途中でお巡りにあって、職務質問される場合だってあるんだからね。その時は、君が説明してやるんだ。
女Ｉ　なんて説明するんです……？
男３　なんてって……。（男Ｉに）それじゃ、それは君が説明することにしよう……。
男Ｉ　何ですか……？
男３　何ですかじゃないよ。よく聞いてなくちゃ駄目じゃないか、大事な話なんだから。いいかい、君は ね、途中でお巡りに会うんだ……。
男Ｉ　どの途中です……？
男３　どの途中って、決まってるじゃないか、家へ帰る途中だよ。それで、お巡りがだなあ、君んとこを呼びとめて、その毛布はどこから盗んできたんだって……。
男Ｉ　盗みやしませんよ、毛布なんて……。
男３　だから、君は盗んでないんだよ。君は盗んでないんだけどもね、お巡りはそう思ってるんだから、盗

んできたに違いないって……。
男Ｉ　どうしてそんなこと思うんです？
男３　知らんよ、そんなこと……。だから、いいかい。君はそのことを説明してやればいいんだ、奴に……。
男Ｉ　奴って誰です……？
男３　お巡りだよ。聞いてんのか君は、私の話を……。君くらい話のわからない奴はないねえ……。そのお巡りにだなあ、この毛布は盗んできたんじゃなくて、このオーキューキューゴショから借りてきたんですって、そう言えばいいんだ……。
女Ｉ　信用するかしら、お巡り……？
男３　信用……？（男Ｉを見て）そりゃしないかもしれないけど……その時は君が証言してやればいいじゃないか。そのためについてゆくんだから。この人の言ってることは本当ですって……。
男Ｉ　冗談じゃありませんよ……。
男３　おい、何言ってんだ、君……。駄目だよ、いつまでもそんな所に寝ていちゃあ。そうだろ？　おい、帰れよ。何も問題なんかないじゃないか、靴だってあるんだし……。（女Ｉに）おい、靴はどうした……？
女Ｉ　そこにあるじゃありませんか……。
男３　（手に取り）ね、これはいて……。毛布まいて……。
女Ｉ　ぶかぶかな んですよ、それ……。
男３　ぶかぶかだっていいじゃないか。とにかくはけるんだから……。（男Ｉに）だからね、お巡りに怪し

まれたら、これもここから借りたもんだって言っていいよ。それならいいじゃないか。誰も君がドロボーだなんて思いやしないさ……。

男ー　私はドロボーじゃありません……。

男３　だから、そうだよ。そのことを私が証明してやるっていってるんじゃないか。

男ー　証明してくれようとくれまいと、私はドロボーじゃあ……。

男ーのものを持ち、男ーのものを着た男２が、そのままぼんやりと引き返してくる……。

その後に、乳母車を押す女２が、うつ向いてゆっくりついてくる。

二人はそのまま舞台を横切って、消える……。

男３　あれは……？　あれは、誰だい、あの、後からついていった……？

男ー　家内です……。

女ー　家内……？　奥さん……？

男ー　ええ……。そして乳母車の中にいたのは、ミツエです……。背中のはヨシオです……。

男ー、ゆっくりベッドの上に倒れこむ。男３と、女ー、しばらく二人を見送って、

それから男ーを振り返る……。

男３　（男ーを見下して）どうしよう……？

女ー　どうしようって……、どうしようもないじゃありませんか。先生が毛布のことをもっと早く思いついていれば、こんなことにはならなかったんです……。
男３　何言ってんだ。そりゃ毛布のことは、もっと前に思いついていたよ。だけど、こいつが返しに来なくなるんじゃないかなって……そのことがあったからね。現に君ついていくのはいやだって言ったじゃないか……。
女ー　動かせないんですか……？
男３　動かせないよ。それに、動かせたところで、どこへ動かすんだい……？
女ー　本当に……。（男ーをゆすって）本当に駄目ですよ、あなた……。どうしたんです、いったい……？
男３　それじゃね、私はちょっと行ってくるから……。（自転車に）
女ー　どこへ行くんです、先生……？
男３　だからさ、私は居なかったことにしよう、ここには……。だってそうだろ？　こんなこと報告出来やしないよ。
女ー　（自転車を押さえて）それじゃ、私はどうなるんです。全部、私の責任にしようって言うんですか？
男３　そうじゃないよ。そうじゃないけどね……。いいじゃないか、君はまだ若いんだから……。
女ー　冗談じゃありませんよ。
男ー　カンゴフさん……。
女ー　（男ーに）ちょっと待って下さいって言ってるじゃありませんか。（男３に）いいですよ、先生。先生がそうなさるんでしたら、私もそうします……。（机の上の自分の荷物を整理しはじめる）私も行き

ますから……。
男３　行くって、どこへ行くんだい……？
女１　どこだっていいじゃありませんか。もう私は、こんなところ、うんざりしてるんです……。
男３　だけど、ここをこのままにして行くわけにはいかないよ。だって、誰かが来て、何か持ってってしまうかもしれないじゃないか……？
女１　知りませんよ、私は、そんなこと……。
男３　知りませんて……。
男１　カンゴフさん……。
女１　なんですか、いったい、さっきから……。静かにしてて下さいよ。今はそれどころじゃないんですから……。
男１　苦しいんです……。
女１　苦しくなんか、ありません……。
男３　わかったよ。それじゃ、こうしよう。私はこれから行って、これ片づけてくれって連絡してくるから……。それまでここにいるんだ、君は……。
女１　いやです。私はもう、ほんのちょっとでも、こんな所にいたくないんです……。
男３　ここをどうするんだ、ここを……？
女１　知りませんて言ってるじゃありませんか……。（荷物を持って、コートをはおる）
男３　いいよ。それじゃ、君が連絡してくれ、ここを片づけてくれって……。それまで私はここにいるから……。

女Ｉ　さよなら……。
男３　連絡するんだぞ、必ず……。そうじゃないと、私はいつまでも、ここから動けないってことになるんだから……。

女Ｉ、去る。

男Ｉ　カンゴフさん……。

やや、間……。

男Ｉ　カンゴフさん……。
男３　奴はもういないよ……。
男Ｉ　どこへ行ったんです……？
男３　わからないんだ、どこへ行ったのかね……。（椅子に坐る）
男Ｉ　なんとかして下さい……。ひどく苦しいんです……。
男３　しようがないよ。苦しいのは、君だけじゃないんだから……。みんな苦しいのさ……。それをみんな、じっと我慢してるんじゃないか……。君にだけ、それが出来ないなんてことはないはずだよ……。
男Ｉ　そりゃそうですけどね……。なんとなく、胸のこの辺が……。
男３　ねえ、君、奴は本当に連絡すると思うかい……？ ここを片づけるようにって……。

男1　息が、つまりそうなんです……。
男3　息じゃないよ。君は、さっきからそうなんだ。自分のことばかり言って、一度でも私のことを聞こうとしたことがあるのかい？
男1　何なんです、いったい……？
男3　言ったろう？ 今、私はね、ここを片づけるように、奴が本当に電話するかどうかを心配してるんじゃないか。もし奴が電話しないで、そのままどこかへ行っちゃったら、私はどうなるんだい？ このまま馬鹿みたいに、いつまでもこんなところに坐っていろって言うのか。冗談じゃないよ。冗談じゃないんだよ、本当に、これは、君……。（語尾で、リヤカーを引いて現われた男たちを認める）

男4と5と6が、リヤカーを引いて現われ、応急救護所の前に停る。
そのまま黙って、机や椅子などをリヤカーに積みはじめる。

男3　なんだい、君たち……？
男4　これ、運ぶんじゃないんですか……？
男3　いや、そりゃそうだけど……。ちょっと、待てよ、君たち……。
男1　どうしたんです……？
男3　それじゃ、あれかい？ 連絡を受けてきたのかい、君たちは……？
男5　天幕もたたむんですか……？
男4　もちろんだよ。たたむんでしょう、先生……？

男３　まあ、そうなんだけどね……。彼女にそう言われたんだな？だから、女の声で電話があったのかい……？

男１　何をするんです、先生……？

男３　いや、だから、片づけるんだよ、ここを……。

男１　どうして片づけるんです……？

男３　どうしてって……いや、だからね、……。おい、本当に君たち、連絡を受けてきたんだろうなぁ……。

男１　片づけちゃったら、私はどうなるんです……？

男３　どうもなりゃしないさ、君は関係ないんだから……。（男６に）おい、乱暴するなよ、壊したら責任とってもらうぞ。

男４　（男６に）丁寧に扱えって言っといただろう？

男６　すみません……。

男１　でもね、先生……。

男３　うるさいって言ってるだろう、君は……。

女１、そそくさと引き返してくる。

男３　君、どうしたんだ、いったい……？

女１　どうしたんだじゃありませんよ……。私、このあたりに……（探しながら）こんな風なメモ帳落して

なかったかしら。電話番号が書いてあるんです……。
男３　君が連絡したんだね、これは……？
女１　いいえ。（探しながら）連絡なんてしませんよ、私……。
男３　連絡しなかったって？
女１　だって、しようとしたら電話帳がないんですから、しようがないじゃありませんか。だから、しようとはしたんですよ、私は……。しないでおこうと思いましたけど、それじゃあんまり先生が気の毒だと思って……。
男３　いや、それはいいけどね……。それじゃ、これは何だい……？
女１　なんですか、これって……？
男３　だから……ね、片づけにきているんだから、現に……。
女１　知りませんよ、そんなこと……。ともかく、電話帳探していただけません。それがないと、いつまたっても連絡出来ないんですよ……。
男１　カンゴフさん……。
女１　あら、あなた、まだ居たんですか……？
男１　どうなるんです、ここは……？
女１　どうもなりゃしませんよ、電話帳がないんですから……。（男１を見て）あなた知りません、私の電話帳……？
男１　知りませんよ……。
男３　だけど、いいかい？　君が連絡してないとしたらだよ、どうして来ているんだい、この？……

女１　私、本当に連絡なんてしてませんよ。だって、そんなこと嘘ついてどうなるんです。連絡してたら連絡したって、正直に言いますよ、私は……。
男３　いや、だからさ……ね……。だとすれば、おかしいじゃないか、こういう……。
男４　先生……。（男１とそのベッドを指して）こいつはどうします？
男３　それはいいよ。
男４　いいってどういうことです？
男３　いいって言ってるじゃないか、放っとけば……。そいつは関係ないんだから……。（女１に）ね、君、ちょっと冷静になって考えてみろよ。だって君は、連絡しなかったんだよ。
女１　だからそれは、電話帳がなかったからって言ってるじゃないですか。しようがないでしょ、電話帳がなければ、電話番号がわからないんですから……。
男３　そうじゃなくて……。
男１　カンゴフさん……。
女１　（男１に）うるさいわねえ、あなたも……。
男１　みんなして、私を置いてこうとしてるんです……。
女１　しようがないでしょ、あなた帰ろうとしないんですから……。
男１　動かないんです、身体が……。
男３　（女１に）いいかい、君……。
男６　済みました……。男４　じゃあ、行こう……。
男３　いやいや、ちょっと待ってくれよ、君たち……。（５と６に）おい……。

男４　何ですか……？
男３　いや、その……何だってことでもないけどね……。（女１に）ねえ、君……。
男４　急いでるんですよ……。

男４と、５と、６、リヤカーを引いて消える。
男１、むしろの上に寝かされている。

女１　何なんです、あの人たち……？
男３　だからさ……おかしいだろう？　君が連絡してないんだとすれば……。
女１　（はじめてあたりの様子に気付いて）どうしたんです、ここは……？
男３　どうしたんですじゃないよ。今ここでやってたじゃないか、奴らが……。
女１　片づけちゃったんですか、あの人たちが……？
男３　そうだよ。言ったろう？　私は何度も言ったよ。おかしいんじゃないかって……。
女１　それで……？　持ってっちゃったんですか……？
男３　だって、見てたじゃないか、　君だって……。
女１　そりゃあ見てましたけど……。
男３　私はてっきり、君が連絡したのかと思って……。
女１　私、連絡しなかったって、言ったじゃありませんか。
男３　言ったよ。だからね……だから、私も、おかしいなって……そう思ってたんじゃないか……。

男１　私はどうなるんです……？
女１　おかしいと思ったら、聞いてみればいいじゃありませんか……？
男３　聞いてみるって……何を……？
女１　だから、何をしているんですかって……。
男３　でも、何をしているかなんて……見ればわかるんだから……。
女１　見ててわからなかったんでしょう、先生……？そうでしょう？それとも何かわかったんですか、あの人たちが何をやったか……？

やや、間……。

男１　もしかしたら、ドロボーじゃないんですか……？
男３　ドロボー……？
女１　ドロボーじゃありませんよ……。私、知ってますけど、ドロボーはあんな風じゃありません。たいていのドロボーは、こっそり近付いて、パッと盗って、サッと逃げるんです……。
男３　でも……ドロボーかもしれないよ。パッとじゃなかったけど、盗ったし、サッとじゃなかったけど……もうここにはいないんだから……。
男１　ドロボーです、きっと……。

やや、間……。

女ー　それじゃ、先生、どうして追いかけないんです……？
男３　追いかける……？
女ー　追いかけれ ば追いつけますよ。先生には自転車があるんですから……。
男３　そうだけど……追いかけて……それで、追いついたら、どうするんだい？
女ー　聞けばいいじゃありませんか、何をしてるんですかって……。
男３　何をしているんですかって 何か言ったらどうしよう？ね、わかったよ……。（行きかけて）でも、
　相手が立ち止まって、何か言ったらどうしよう？
女ー　そんなこと自分で考えたらどうなんですか。相手はドロボーなんですよ。
男３　わかった。相手はドロボーなんだ……。（行く）
男ー　ちょっと、ちょっと待って下さい、先生……。

男3、自転車に乗って走り去る。

女ー　（ぼんやり見送って）本当に……。
男ー　カンゴフさん……。
女ー　まだいるんですか、あなた……。ちょっと待って下さい……。私今、何をしようとしていたんだったかしら……？
男ー　私の靴がないんです……。

女ー　靴が……？　いいじゃありませんか、どうせもともとあなたの靴じゃないんですから……。そうじゃなくて……あ、そうだわ、電話帳よ……。私、電話帳を探さなくちゃいけないんだわ……。あれは、私のものなんですからね……。

男ー　私はどうなるんです……？

女ー　知りませんよ。自分のことは自分で責任をとって下さい。お互いにみんな忙しいんですから……。

男ー　でも私は、私の責任でこんな風になったんじゃありませんよ……。

女ー　あなた、本当に知りません、私の電話帳……？

男ー　知らないって言ってるじゃありませんか。ねえ、カンゴフさん……。さっきから、身体に全然力が入らないんです……。これは、何かの病気じゃないんですか……？

女ー　わかったわ。それよ。さっき私、あなたに水あげましたわね……？

男ー　いえ、水はもらいません。私は要らないって言ったんです……。

女ー　そうじゃなくて、その前よ。あなたが水を飲んで、そのコップを置こうとして、だからその時、水差しの下に……。あいつらだわ……。（行こうと）

男ー　（その裾をつかんで）待って下さい、カンゴフさん……。

女ー　放して。何をするの。あいつらが持ってったのよ、私の電話帳を。

男ー　だけど、あなたが行っちゃったら、私はどうなるんです……？

女ー　放しなさい、ほら……。私がいたってどうしようもないでしょ。

男ー　（放す）でも、あなたがいなくなったら、私はひとりで、こんな所に寝ていなくちゃならないんですよ。変に思われるじゃありませんか、みんなに……。

女１　しようがないでしょ。あれがなくなったら、誰とも連絡出来なくなってしまうんですから……。

女１、走り去る……。

男１　困りますよ、カンゴフさん……。カンゴフさん……。

男、あきらめて再びグッタリとむしろに倒れこむ……。
巡査の格好をした男７が、現われる。男１を見ながら行き過ぎようとして
しかしさすがに立ち止る。

男７　何やってんだ、君……？
男１　何って……何もしてませんよ、私は……。
男７　しかし……駄目じゃないか、こんなところで……。
男１　私は何もしなかったんです。本当ですよ。私はただ、ここを通りかかっただけです……。本当に私は
ただ、ここを……。
男７　なんだい、あれは……？

コーモリ傘をさした男２、その後に乳母車を押した女２、その後にリヤカーを引いた
男４と５と６の行列が、ゆっくりと舞台を横切り、そのまま消える……。

男Ｉ　知りません……。しかし少くとも、私じゃありません……。だって私は、現に今こうして、ここにいるんですから……。
男７　（やや不安そうに）そりゃそうだけど……でも、何してるんだ、こんなところで……？
男Ｉ　言ったでしょう？……私は何もしていないんです……。何をどうしていいのか、わからないんです……。だからきっと、私は、病気なんです……。
男７　まあ、いいけど……。（やや、逃げ腰になって）いいかげんに、あれしないと……何だよ……。
（行こうと）
男Ｉ　ちょっと待って下さい、お巡りさん……。
男７　なんだい……。
男Ｉ　もうしばらくここにいてくれませんか……？
男７　駄目だよ。
男Ｉ　いいじゃありませんか。そうじゃないと私は、変に思われますよ、みんなに……。怪しまれるんです……。
男７　私がいたってしようがないじゃないか……。
男Ｉ　でも、そうすれば私は、もしかしたら護送中の犯人か何かだと思われるかもしれない……。ね、そうでしょう？　そう思われれば、それ以上怪しまれることはないんですよ、私は……。それでいいんです。何かだと思われるのなら、それが何であってもかまわないんです……。なんだろうって、とめどもなく怪しまれるのには、私は、耐えられない……。

男７　いやだよ、私は……。（歩く）
男１　お巡りさん……。
男７　忙しいんだ……。（去る）
男１　お巡りさん。お巡りさん……。

男７、去る。

男１　（つぶやくように）助けて下さいよ、神様……。私が何をしたって言うんです……。私は別に、それほど悪いことをしたつもりはありませんよ……。

オンボロの礼服を着た神様、買物袋を持ってきかかる。

神様　（ぼそぼそと）たしかに、お前は悪いことはしなかった。しかし私だって（あとは、やや不平がましくつぶやく）それほど悪いことをしたってわけじゃないんだから……。

暗転

底本：『足のある死体／会議（別役実戯曲集）』三一書房
1982（昭和57）年6月15日　第一版第一刷発行
1987（昭和62）年2月28日　第一版第二刷発行